

第 22 回松本清張研究奨励事業 研究報告

# 小説に描かれた考古学世界の理想と現実

—松本清張と以後の小説—

奈良県立橿原考古学研究所 絹畠 歩

# 小説に描かれた考古学世界の理想と現実

## —松本清張と以後の小説—

奈良県立橿原考古学研究所 絹島 歩

### 1. はじめに

考古学者は、探偵や警察によく例えられる。一つ一つの事実の積み上げから、仮説を立て、事実を検証していく科学的なあり方は、確かに類似している。そうした類似性と連動するかのようになり、考古学者が登場する小説が一定数存在する。また、考古学が研究対象とする遺跡や遺物は、物語をつなぐ装飾的ガジェットとしても有効であり、この視点からも、考古学情報が多く登場する理由の一つとなっている。

このような小説世界と考古学をつなぐ画期となったのは、松本清張の作品である。松本清張の小説の中には考古学に関するものが多くある。また、古代史に対しての造詣は深く、自らも多くの新説を唱えた。松本清張の作品において考古学情報が登場するのは、1950年代から1970年代が中心であるが、当時の考古学者や遺跡を小説家の立場から叙述したことは、考古学史を考えるにおいても異なる視点として重要である。

このような視点から、松本清張の作品および、他の小説家の作品の中に出てくる考古学情報を収集し、分析していくことで、松本清張が構築した考古学世界の果たした意義、及び大衆文化から考古学がどのように見られ、それが実際とどの程度異なるかを明らかにすることを目的とする。

なお本稿は、その内容の性質上、小説の内容の詳細について踏み込んだ、いわゆる「ネタバレ」が複数存在する。了とされたい。

### 2. 小説に描かれた考古学世界の諸問題

小説に描かれた考古学世界を明らかにするために、考古学世界の定義を行ったうえで、筆者はいくつかの問題提起を行い、それらの課題を前提として議論を行う必要があることを指摘する。次章以降の検討の前提となる課題を挙げて検討を行う。中には、「当たり前」のことを言っていると考えられるものもあるが、検討を行う前提条件としてあえて提示したい。

#### (1) 考古学世界の定義

検討に入る前に「考古学世界」の定義を行う必要がある。考古学世界を構築しているのは、考古学にまつわる情報である。その情報とは、考古学に関連する遺跡・遺物・人物・用語などについてである。以下、各項目について概説する。

##### ① 遺跡

遺跡は人類が残した遺構・遺物の総合体である。世界中に所在し、時代、大きさ、性格も様々である。遺跡は現地表面よりも地下に眠っており、発掘調査を行うことによって、その詳細が考古学者により明らかにされる。しかし、日本の古墳やエジプトのピラミッドなど、発掘調査を行わずとも視認できる遺跡も多数存在する。小説に描かれる遺跡は、1) 発掘調査中の遺跡、2) 発掘調査後、史跡整備な

どで復元がなされた遺跡、3) 発掘調査は行われていないが古墳の隆起やモニュメントなど現在も視認できる遺跡、4) 過去に発掘調査がなされたことなどにより現在知られている遺跡、などが登場する。また小説世界においては、参考資料などに基づいた実在の遺跡が登場する場合と、著者が創り上げた架空の遺跡が登場する場合がある。これらの組み合わせが、小説世界に登場する遺跡となる。

## ②遺構・遺物

遺構は、遺跡を構築する不動産である。竪穴建物や井戸など、それぞれにおいて性格が異なる。小説内においては、遺跡から分離した遺物の登場率は高いが、遺構については遺跡とほぼ同等の意味で捉えられたものも多い。

遺物は、遺跡から出土する過去の人類が残した動産である。遺跡から出土したものであるが、遺跡とは分離することができる。またこの遺跡から出土したか由来のわからない遺物も存在する。

小説に登場する遺物は、土偶や埴輪、銅鏡など各時代で一般的に知られたものが登場することが多い。これらの具体相については、のちの検討により詳細を明らかにしたい。

## ③人物

考古学世界を構築する人物として代表的なのは、考古学者<sup>1)</sup>である。考古学者は、考古学を専門とする研究者であり、大学教員や地方自治体及び民間の文化財専門職、博物館学芸員などの職業であることが多いが、在野の研究者や専攻学生も含まれる。また、小説によっては、考古学世界が登場する中で、考古学情報を主体として取り扱う人物が考古学者ではなく、歴史学者・人類学者・民俗学者などの研究者である場合もある。そのほか、遺物を取り扱う人物として骨董業者が登場したり（北森鴻「旗師・冬狐堂シリーズ」）、考古学を趣味とする人物や無関係な人物が遺跡を訪れたりする場合もある。

小説に登場する考古学者は、1) 実在の人物、2) 実在の人物をモデルとした人物、3) 架空の人物、の場合がある。1) は、小説内で主体的に動く人物の場合はほとんどなく、小説内でその人物の論文に言及されるなどの場合に名前のみ登場することがある。2) は、巻末のあとがきやのちのエッセイなどで著者が言及し、判明することがある。また、著者が言及せずともその内容から実在のモデルを推定できる場合がある。2) の代表的なものは、森本六爾をモデルとした松本清張「断碑」（1954年）の木村卓治である。「断碑」については、実際の森本六爾との整合性など、すでに多くの研究が行われ、言及されている（春成 2003、平岡 2005、和田 2011 など）。また、新田次郎の『霧の子孫たち』（1970年）の主人公宮森栄之助は、在野の考古学者藤森栄一をモデルとしている。3) は、著者によって作られた全く架空の人物である。著者が資料などから実在の人物を参考にした可能性もあるが、著者が言及しない以上はわからない。

映画・ドラマ・アニメ・マンガなどの大衆文化に登場する考古学者については、その分類や年代の変遷について研究が行われている（下垣 2010、櫻井 2014・2021）。下垣仁志は、フィクションに登場する考古学者を4象限モデルにより分類した（下垣 2010：図1）。すなわち、社会への埋没度（脱俗（脱世俗）／超俗（脱凡俗））と物語進行上の機能（物語参入型／アイテム導入型）を軸にし、これらの組み合わせにより4つのタイプに分類した。それぞれ見ていくと、I型（脱俗／物語参入型）は、「物語に参入しつつも、積極的に世間とのかかわりをもたず、ひたすら学問に生きる考古学者像」、II型（超俗／物語参入型）は、「物語に積極的に参入し、そのすぐれた肉体的・頭脳的能力を活かして大活躍し、物語を主体的に牽引してゆくタイプ」、III型（脱俗／アイテム導入型）は、「表だって活躍することはないが、な

んらかのアイテム（主として古代遺物）や古代の秘術を発見することで、物語を駆動させる役割をはたすタイプ」、IV型（超俗／アイテム導入型）は、「物語を推進させるアイテムをみずから発見し、能動的に物語へ参入してゆくタイプ」である。下垣は、この中でミステリー小説などに登場する考古学者の多くがI型であることを指摘している。下垣の分類は、小説世界に登場する考古学者にも有用であり、後に触れたい。

#### ④用語

そのほか、考古学に関連する用語も考古学世界を構築する情報の一つである。発掘調査や研究に関わる専門用語や考古学者の所属機関などが挙げられる。考古学者の所属機関として、大学の考古学研究室、国公立や私立の研究所が登場する場合がある。

#### （2）小説に描かれた考古学世界の前提

それでは、これらの定義に基づく考古学世界を小説世界の中で検討するためには、提起しておかねばならない前提条件がある。以下、それらを挙げたうえで検討を行う。

①小説に描かれた考古学世界は著者それぞれにより構築されており、その構築の程度は著者に依存していること。

最も基本的かつ重要な事項である。当然のことながら、考古学を描く小説は著者それぞれによって異なり、著者一人においても小説により、描かれた考古学世界の元になった基盤が異なっている。その基盤については、著者によって巻末に参考文献を付している場合があり、そのような場合は考古学世界の構築元を検討することができる。しかし、小説は学術論文ではないので、必ずしも参考文献をつける必要はない。また著者の完全なオリジナルの部分も多く存在するだろう。考古学世界を描いた小説の分析を行う際には、まずこの点を踏まえて分析を行う必要があるだろう。

②著者の構築した考古学世界が必ずしも現実の考古学を踏まえることを目標としてはいないこと。

①の検討事項の続きである。小説の著者は、考古学世界を再現することを決して目的としてはいない。小説世界を構築するにあたって考古学世界に触れるのである。中には、「考古学」と謳っているものの、実際には全く関係していないこともある。例えば、「インディ・ジョーンズシリーズ」の主人公インディアナ・ジョーンズ<sup>2)</sup>や、「ONE PIECE（ワン・ピース）」のニコ・ロビンらは、映画・アニメの世界において有名な架空の考古学者であり、考古学者といえだれかと尋ねたとき、多く名前の挙がる人物たちである。しかし、実際の考古学者は、財宝を探すようなトレジャー・ハンターではないし、悪い敵と戦ったり、命がけの冒険に出たりはしない。ただし、これは現実の考古学世界からみた場合で、それが考古学世界として描かれることは決して悪い問題なのではない。重要なことは、考古学世界がなぜそのような描かれたか、その背景を探ることにある。

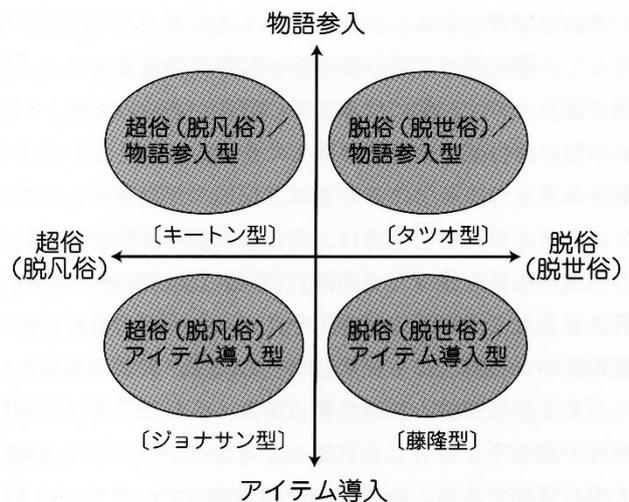


図1 フィクションの考古学者の4象限分類  
(下垣 2010)

③著者の構築した考古学世界が正しいかどうかは、現段階で不明なことも多いこと

②で指摘したような現実とは相当乖離した考古学世界を除外すれば、残りが現実の考古学世界を正しく描いたものになるかといえば、決してそうではない。現実の考古学世界は、現段階での研究成果の積み重ねによって構築されているものであり、日々の研究、発掘調査によって絶えず変化し続けている。また、考古学で明らかになるものには限界が存在し、範囲外についてはそれを理解することができる新たな研究方法が見つかるまで、あるいは永遠に明らかにすることができない事実も多数存在する。小説の筆者は、このようなこととは関係なく、自由に考古学世界を構築することができる。

筆者も講演や現地説明会などで、某小説の内容が正しいかどうかなどを質問された経験がある。現在明らかとなっている考古学的研究成果と異なる場合はそれを指摘できるが、考古学研究で説明できないことに対しては、正しいかどうかわからない。

以上のように、小説に描かれた考古学世界を分析するためには、多くの前提を踏まえる必要がある。そうした点を踏まえながら、考古学世界を検討し、相互を紐づけしていくことによって、小説に描かれた考古学世界がどのような背景をもって描かれてきたのかを明らかにすることができ、またそれが現在の考古学とどの程度共通し、あるいは相違するのかを明らかにすることができると考える。さらに、考古学世界を多く描いた松本清張の作品についても同様の視点から分析することにより、松本清張の作品の中での変化及びのちの小説との共通点・相違点を明らかにすることができるものとする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 分析対象

本研究の対象となるのは、考古学世界が描かれた小説である。しかし、小説は年間何冊刊行されているのであろうか。総務局統計局のデータによれば、日本国内において書籍は年間約7万3千冊刊行されており、その中で文学ジャンルは年間約1万3千冊刊行されている<sup>3)</sup>。その中で、管見の限り集成に努めたが、すべてを網羅することは不可能に近い。しかしながら、集成した小説を分析することで、一定の傾向を見出すことはできるものとする。集成した小説は、考古学世界が登場しやすいミステリー小説を中心としているが、ミステリー以外の分野のものも管見の範囲で含めた。また、海外のミステリー小説においても、古くはアーサー・コナン・ドイルのシャーロック・ホームズシリーズや、アガサ・クリスティのエルキュール・ポアロシリーズなど、多くの考古学世界が登場する作品がある（絹島2017、絹島・前田2018など）。しかし、未邦訳の作品も含めて全てを確認することは国内小説よりもさらに限りなく不可能に近いので、今回は検討から除外した。

#### (2) 分析の方法

分析については、まず松本清張の作品における考古学世界の検討を行う。前章までの検討事項を踏まえて、松本清張の作品のうち、考古学世界を構成する人物（考古学者）、遺跡、遺物の登場する作品を抽出し、各項目の共通性の有無、および通時的変化の検討を行う。また、松本清張の作品のうち考古学世界の様々な要素を取り入れた小説である『内海の輪』を素材として、考古学世界の検討を行う。松本清張の作品については、基本的に松本清張全集（文藝春秋）を参照した。

次に松本清張以外の小説に登場する考古学世界を検討する。松本清張の作品と同様に、考古学世界が登場する小説を集成し、各項目の検討を行う。最初に考古学世界の全体的な内容の変遷をとらえたうえ

で、人物（考古学者）、遺跡、遺物の検討を行う。人物については、描かれた考古学者の小説内での役割、職業・専門・年齢などの考古学者像を検討し、共通性や時期的変遷の有無を検討する。遺跡・遺物については、描かれやすい遺跡・遺物の有無、遺跡・遺物の属する時代などの共通性や時期的変遷の有無を検討する。

最後に、以上の検討を踏まえたうえで、松本清張作品と以後の小説における考古学世界を比較し、松本清張作品における考古学世界の特徴を把握する。さらに、小説世界で登場する考古学世界が、大衆文化としてどのような意義を持つかについて、考察を行いたい。

#### 4. 松本清張が描いた考古学世界の理想と現実

##### （1）松本清張の描いた考古学世界の検討

最初に、松本清張作品のうち、考古学世界が登場するものを抽出、集成した（表1）。考古学世界の抽出に当たっては、大津忠彦の一連の松本清張作品にける考古学世界の研究（大津2009、2013、2014、2015、2017、2020など）を参考とした。

考古学者が登場する作品は、『断碑』（1954年）や『石の骨』（1955年）、『内海の輪』（1968年）などが見られる。『内海の輪』については後述する。職業は、教員や大学教員などが中心である。また、考古学者が登場しない作品においても、『笛壺』（1955年）や『葦の浮船』（1966～1967年）では文献史学の研究者で考古学への興味を持つ人物、『波の塔』（1959年）では考古学を趣味とする人物などが描かれている。

考古学世界の登場する時代については、縄文時代と弥生時代の作品が非常に多いことがわかる。1950年代～1960年代の作品は特に縄文時代・弥生時代が登場する作品が多い。また、1970年代以降になると、日本考古学のみならず、西アジアや東アジアなどの海外の遺跡・遺物が登場するようになることも特徴的である。ここに松本清張の作品における考古学的記述の変化を読み取ることができる。『火の路』（1973～1974年）についても、飛鳥の石造物とゾロアスター教との関係を追求し、西アジアの考古学世界も登場している。

遺跡を見ると、現実に存在する遺跡が多く登場しており、地域も関東から九州地方まで広く登場している。それぞれの作品で独立して登場しており、その作品で主題となった遺跡については、他の作品に登場することがない。

遺物にもいくつかの特徴が認められる。縄文土器・弥生土器などは、現実の発掘調査においても出土量・割合ともに多いものであるが、松本清張作品においても多く登場する。さらに作品によっては、単に縄文土器、弥生土器という記述だけでなく、型式や特徴まで記されている。『途上』（1956年）に登場した「O川式土器」は、前後の描写から「遠賀川式土器」の可能性が考えられ（大津2014）、このようにアルファベットで匿名化しつつも現代にまで使われ続ける用語を使用している。また、次に詳述する『内海の輪』（1968年）に登場する櫛描文を持つ弥生土器とクリス型銅剣（銅戈）は、近い時期に書かれた『鴉外の婢』（1969年）と『火神被殺』（1970年）にそれぞれ登場しており、松本清張のその時期の興味関心を示しているものと考えられる。

表1 考古学世界が登場する松本清張作品

タイトル	発表年	考古学者（役割）	時代	遺跡	遺物
距離の女囚	1954	在野→大学教授（その他）	弥生	唐古、岩室、中曾司（奈良県）	瓦、土器、石器
断碑	1954	教員（主人公）	弥生・古墳・古代	上総国分寺跡（千葉県）	埴輪、陶棺、青銅器（多紐細文鏡・銅鐸・銅剣・銅矛）、弥生土器
笛壺	1955		古墳・古代		須恵器（祝部土器）
石の骨	1955	教員（主人公）	旧石器		打製石器
途上	1956		弥生		弥生土器（O川式土器）、石器
カルネアデスの舟板	1957	大学学長（その他）			
支払い過ぎた縁談	1957		弥生		石庖丁
波の塔	1959		縄文・弥生	尖石（長野県）、千種（新潟県）	土器、遺存体
高校殺人事件	1959～1961		縄文～古代		土器、石器（石斧・石鏃・石庖丁）、土偶、古瓦
万葉翡翠	1961	大学教員（その他）	縄文・古代		縄文土器（加曾利E式）、石器（石斧・石匙）、勾玉（ヒスイ）
不安な演奏	1961				壺、土器
葦の浮船	1966～1967		縄文	新堀川、古府、笠舞、朝日（石川県）	縄文土器
月	1967		弥生		金印
土偶	1967	学生（被害者）	縄文		土偶
内海の輪	1968	大学教員（主人公・加害者）	弥生	会下山（兵庫県）	青銅器、弥生土器（楡描文）、ガラス釧
鷗外の婢	1969		弥生～古代	石塚山古墳、綾塚古墳、御所ヶ谷神籠石（福岡県）	銅鏡、弥生土器（楡描文）
火神被殺	1970		弥生～古墳（古代史）		銅戈（クリス型銅剣）
巨人の礎	1970		縄文	大串貝塚（茨城県）	
神の里事件	1971		古墳		銅鏡
冷遇の資格	1972		アッシリア（BC3000）		
熱い絹	1972～1974、1983～1984		ササン朝ペルシア、カンボジア	バンテアイ・スレイ、アンコール・ワットなど	ガラス碗、彫像
高台の家	1972		中国唐・明		青磁（明）、唐三彩壺など
火の路	1973～1974		古墳～飛鳥	新沢千塚、酒船石、益田岩船（奈良県）	
眩人	1977～1980		古代	頭塔（奈良県）、熊山遺跡（岡山県）、紫香楽宮（滋賀県）	瓦、須恵器
ネッカー川の影	1990	大学講師（その他）	旧石器（ドイツ）		打製石器

## （2）『内海の輪』を考古学的視点で読む

本節では、松本清張の作品のなかでも考古学世界が濃厚に構築されている『内海の輪』（1968年）について、前章までの分析事項をもとにして、比較していく。『内海の輪』における考古学的検討は、すでに大津忠彦氏により網羅的に行われている（大津2009）。本節では、大津氏の論考に導かれながら新たに検討を行いたい。引用のページは、すべて『松本清張全集9』（1971年、文藝春秋）に基づく。

### ①『内海の輪』のストーリー、小説の背景

本作品は、主人公である新進気鋭の考古学者江村宗三が、長年の不倫相手である美奈子との関係の中で殺意を抱き、兵庫県の蓬莱峡で崖から突き落とし、殺害に及ぶ。その後、殺害現場周辺で発掘調査が行われると同時に、遺体も発見され、警察が捜査し始める。発覚に怯える宗三は、加害時の遺留品の残存を気にして現場付近を捜索するが、その際に弥生時代のガラス釧を発見する。ガラス釧を骨董業者から購入したことにして知り合いの考古学者に見せると、それがエッセイの中で公開され、そこから警察の手が宗三へと伸びていく。

本作品は、犯人側の視点で犯行から発覚に至るまでの過程が描かれる倒叙形式で描かれている。松本清張は初期作品から倒叙形式を使用した作品を発表しており、その形式に文学性を見出し、意識的に使用していたと考えられている（曹 2017）。本作品は、そのような倒叙形式に、初期作品から描いてきた考古学世界を融合させた作品であるということが出来る。以下、本作品における考古学的世界を構築している人物、遺跡、遺物の各項目について検討を行う。なお、その多くについては、先に述べた通り大津が詳細な検討を行っており（大津 2009）、本稿もその成果を適宜引用しつつ、改めて検討を行ってきたい。

## ②『内海の輪』に登場する考古学者

内海の輪の主人公にして加害者である江村宗三は考古学者である。大学の助教授を務め、「気鋭な新進学徒として学界からますます注目された」（p435）存在であった。犯行ののち、教授となる。専門は、「主として弥生式時代の研究」（p435）である。弥生時代後期の高地性集落研究に興味を持っていた描写がある。主人公の年齢は、40代前半である。

## ③『内海の輪』に登場する遺跡

『内海の輪』の中には、複数の遺跡に関する会話や描写が登場する。これらについてそれぞれ検討してみたい。

### ・岡山の遺跡（備中の浜尾新田の住居址）

物語の序盤で宗三と美奈子が岡山で密会する理由となった遺跡である。広島県との県境近くで地元の大学との共同調査を行う可能性を宗三が美奈子に伝える場面から物語は始まる。その後その調査は地元の大学の意向で助教授である宗三が行かなくともよいことになる。「備中の浜尾新田の住居址発掘」（p386）で、「住居址だけでなく、水田の址もある」（p386）。「海岸線から二十キロばかり内陸にはいった所で、はっきり分らないが、どうやら静岡県の登呂遺跡に次ぐ規模になりそうだ」（p386）と記述されている。

「浜尾新田」という地名は、見つけることができず、存在しない地名の可能性はある。一方、広島県との県境近くと海岸線から20キロばかり内陸であるという立地の条件で探索すると、小説執筆時点までで知られた遺跡として岡山県井原市五万原遺跡が該当する。五万原遺跡は、弥生時代後期の遺跡で1965年と1967年に調査が行われ、3基の竪穴建物を確認している（間壁・間壁 1968）。しかし、五万原遺跡は、石庖丁の出土から近隣に水田遺構の存在の可能性が指摘されているが、水田遺構自体は確認されていない。また、登呂遺跡に次ぐ規模でもなく、発掘主体は美星町教育委員会の依頼を受けた倉敷考古館である。この岡山の所在する遺跡は、松本清張が複数のモチーフから創作した遺跡であったのかもしれない。

### ・岡山の遺跡（牛窓周辺の貝塚）

宗三と美奈子が岡山をめぐる中で、宗三が牛窓に行きたいと告げ、牛窓周辺の島に縄文前期の貝塚があることを告げる場面がある（p395）。牛窓周辺の島嶼部で当時知られていた遺跡として黄島貝塚と黒島貝塚がある。両者ともに執筆当時から縄文時代早期の遺跡として知られていた遺跡であり（藤岡 1949、鎌木・木村 1956、鎌木・高橋 1965 など）、その評価は現在でも変わっていない（小林 1997a・b）。本場面についても、これらの遺跡を想定しながらも遺跡の時期などに変更を加えた可能性がある。

### ・兵庫県西宮市岩倉山西北方の山麓の遺跡（蓬莱峡）



図2 蓬萊峡周辺の遺跡 (S=1/60,000)



写真1 蓬萊峡



写真2 蓬萊峡から船坂へ



写真3 会下山遺跡復元掘立柱建物

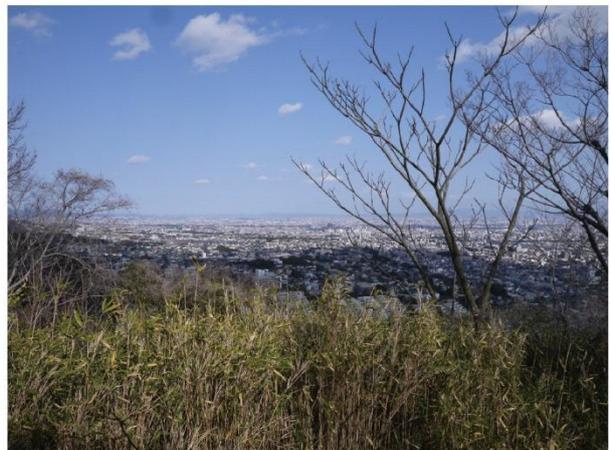


写真4 会下山遺跡から市街地を望む

山歩きの青年によって銅剣と弥生土器が発見され、遺跡として認知されたことで地元の大学から宗三が所属する大学へと発掘調査の依頼を受ける（p441）。しかし、そこは美奈子を殺害した蓬萊峡周辺であり、宗三は恐怖を覚える。美奈子を殺害した周囲で青銅器などが見つかり、大学による発掘調査が始まる。現地の発掘調査の結果、出土した遺構は円形に二重の列石をもつ環状列石の祭祀址であり、クリス型銅剣（銅戈）のほか、細形銅剣が出土した。

この遺構は、埋葬施設などではなく埋納遺構と考えられる。青銅器を石の下に埋納する事例は、香川県などに石の下に銅鐸が埋納された事例などがあるが、少数である（石橋 2011）。多くは埋納土坑の中に納められて、周囲に施設を設けない。

また、蓬萊峡にこのような青銅器埋納遺構が存在する可能性であるが、蓬萊峡周辺の周知の遺跡地図を見ると、周辺には遺跡が認められない（図2）。しかし、遺跡地図は悉皆的踏査などにより確認が行われたものや、発掘調査により確認されたものなどの総合体であり、現状遺跡が無いからと言って、絶対に遺跡がないとは断言できない。

遺跡の有無と地形、景観を確認するために、蓬萊峡周辺の踏査を行った（写真1～4）。現地は急峻な斜面地であり、平野を見渡すこともできない（写真1・2）。一方、小説内にも名前が登場する弥生時代の高地性集落である会下山遺跡は、竪穴建物や掘立柱建物を作ることのできる尾根や緩斜面があり、平野部を見渡すこともできる（写真3・4）。宗三が、高地性集落とは異なる祭祀的性格の遺跡であること

を言及しているが (p446)、そうした集落を見渡すことができない祭祀遺跡は存在するとしても普遍的ではないことが認識できるだろう。

・六甲山の高地性遺跡 (五箇山、会下山、城山、保久良、叔母野山) (p441)

蓬莱峡で発見された遺跡の評価として、高地性遺跡 (集落) である可能性を主任教授が示し (p441)、その例として六甲山周辺の五箇山 (五ヶ山)、会下山、城山、保久良、叔母野山などの遺跡を挙げる。これらの遺跡の位置、時期などはすでに大津が示している (大津 2009)。戦前から知られていた保久良遺跡を除いて、戦後から小説執筆時点までに確認された遺跡である (若林・斉藤 1963)。

#### ④『内海の輪』に登場する遺物

本小説には、遺跡同様多数の遺物が登場する。その中で、宗三の所属する大学の発掘調査で出土した銅剣・弥生土器・石器、宗三が手に入れ、地元の大学の調査でも出土したガラス釧、そして地元の大学の調査で出土した多紐細文鏡について論述したい。

・銅剣

クリス型銅剣と細形銅剣が登場する (図3)。クリス型銅剣は、遺跡発見のきっかけとなり、当初は銅剣とのみ報告を受けていたもので、講師が宗三に先んじて確認したところ、クリス型銅剣であることが判明した。クリス型銅剣は銅戈のかつての名称であり (高橋 1925 など)、本小説内でものちに記述にブレがみられる。すなわち、同一のものを指している個所を順にみていくと、「一種のクリス型銅剣」(p444) → 銅戈 (p450) → 「クリス型銅剣 (銅戈)」(p454) という記述の変遷が見られる。これは、松本清張がこの遺物の名称について、どちらに記述するかを迷っていた証拠といえよう。

細形銅剣は、宗三の大学の発掘調査により弥生時代中期後半の櫛目文土器と一緒に見つかる。小説内では、弥生時代前期末から中期にかけてのもので、出土はほとんど九州に限られ、それより以東からは出てこず、中期の細形銅剣が六甲山塊から発見されたのははじめてであったと記述されている (p454)。

この記述について、今日の研究に照らし合わせてもほとんど問題ないといえるが (岩永 1980 など)、六甲山に近い分布として、南あわじ市古津路出土例がある (図3：大平・種定 2009)。本例は、1969年の緊急発掘調査で出土したものであるが、長く正式報告されてこなかったものである (大平・種定 2009)。この事例の出土は、『内海の輪』連載 (1968年) の翌年であり、その記述に当時としては問題ないばかりか、先見の明を深く感じさせるものである。

・弥生土器

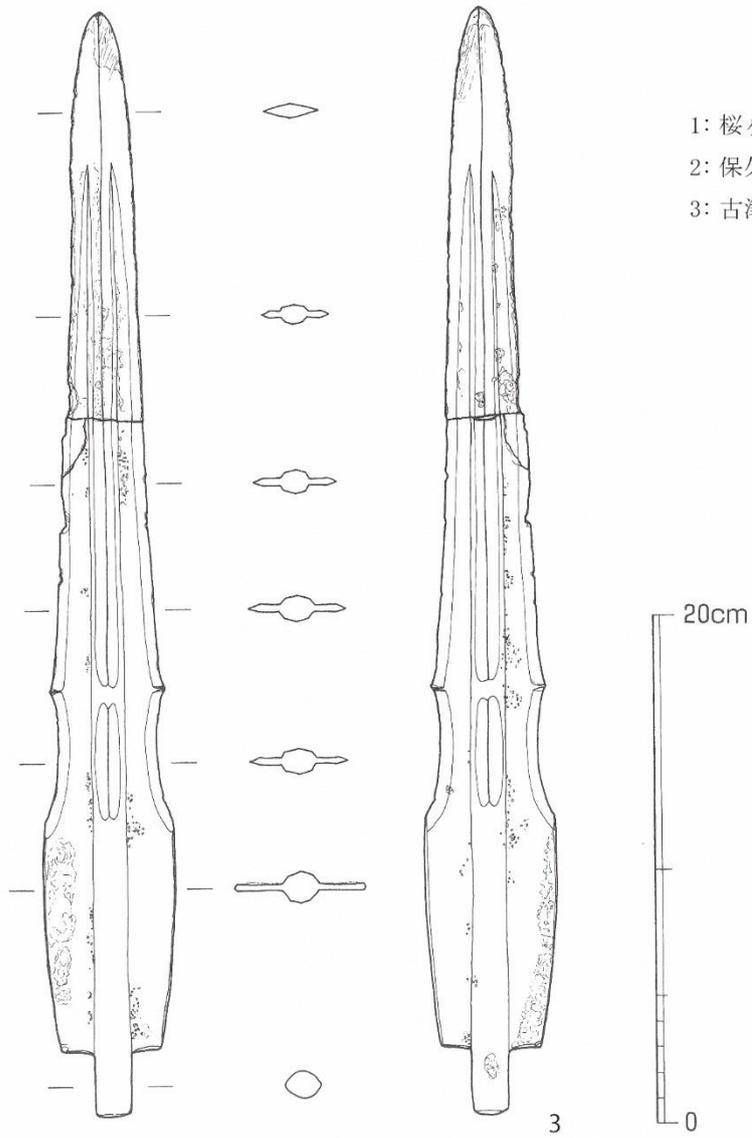
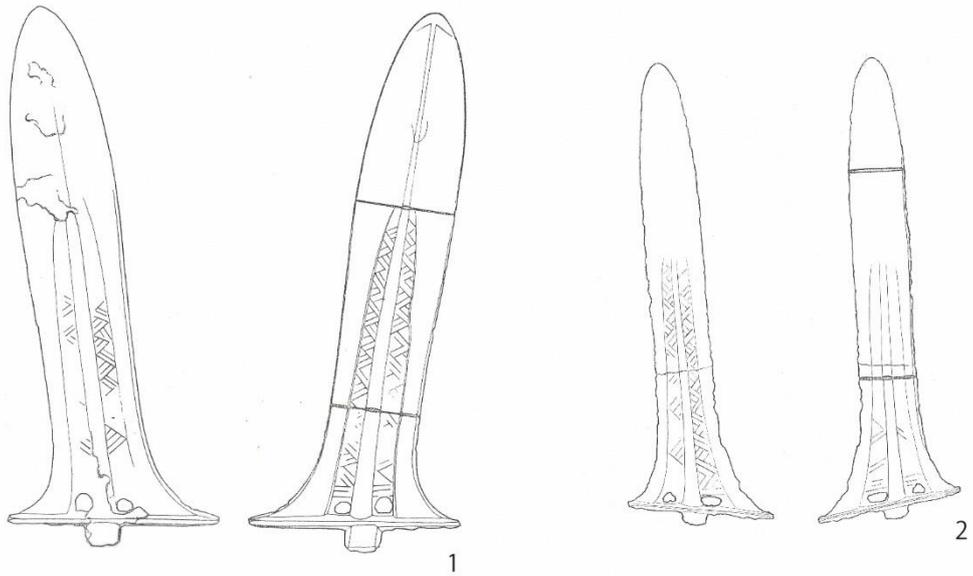
細形銅剣とともに出土した。「櫛目式で、いわゆる畿内第三様式に属している (p444)」と記述される。

畿内第Ⅲ (三) 様式に属する弥生土器は、小説が描かれた当時、弥生土器の編年において弥生時代中期中葉に属する時代の土器とされていた (図4：小林・杉原編 1968)。小説内には「櫛描文」の書かれたとあるが、櫛描文が描かれた弥生土器は畿内第Ⅲ様式に盛行するもので (田辺・佐原 1966)、松本清張の描写が当時の研究状況を反映した正確なものであったことがわかる。

・石器

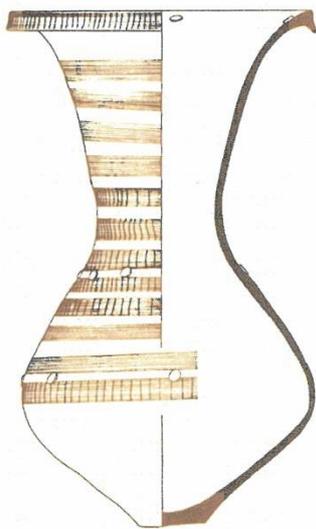
弥生土器とともに発掘調査によって出土したことが講師の塚田から説明される。「石鏃・石錐などがあり、打製のものは六甲山から出る輝石安山岩、つまり灰黒色のサヌカイト」(p444)、「磨製のものは石斧」があると記述されている。

打製石器については、六甲山産のサヌカイトが石材であるとされている。現在の弥生時代研究では、

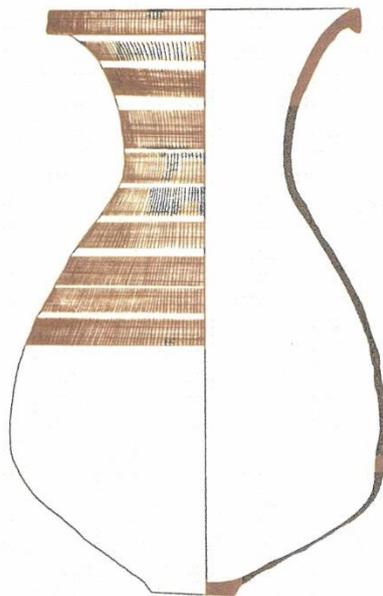


- 1: 桜ヶ丘例
- 2: 保久良神社例
- 3: 古津路 14 号例

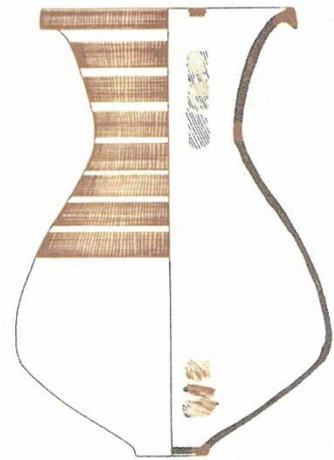
図3 蓬萊峡周辺出土の銅戈・細形銅劍 (1・2:S=1/4、3:S=1/3)



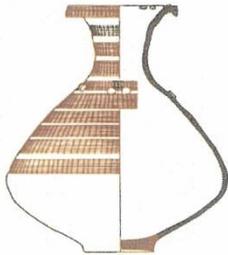
77 大阪 船橋



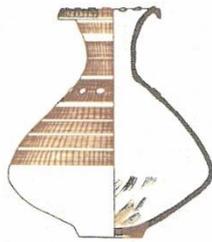
78 大阪 船橋



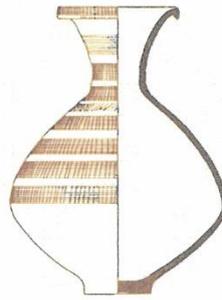
79 大阪 船橋



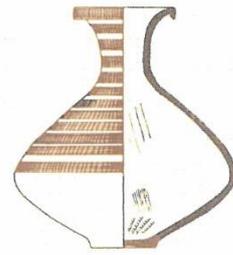
83 大阪 船橋



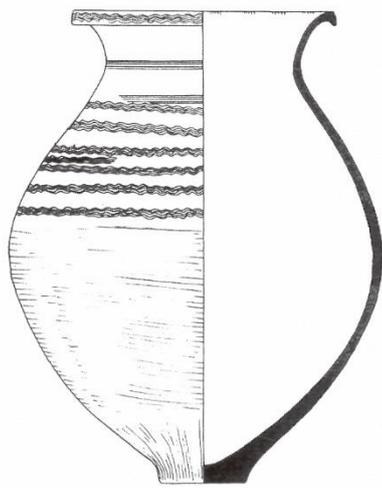
84 大阪 船橋



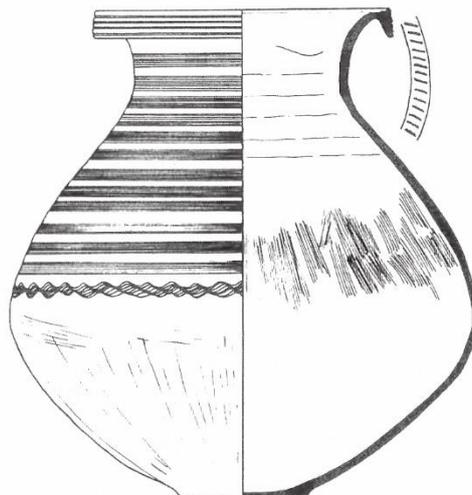
85 大阪 船橋



86 大阪 船橋

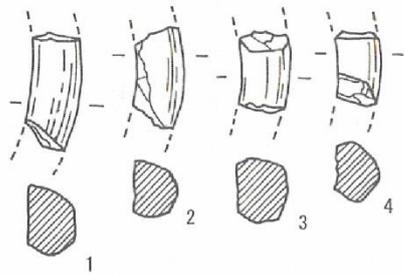


99 奈良 一町

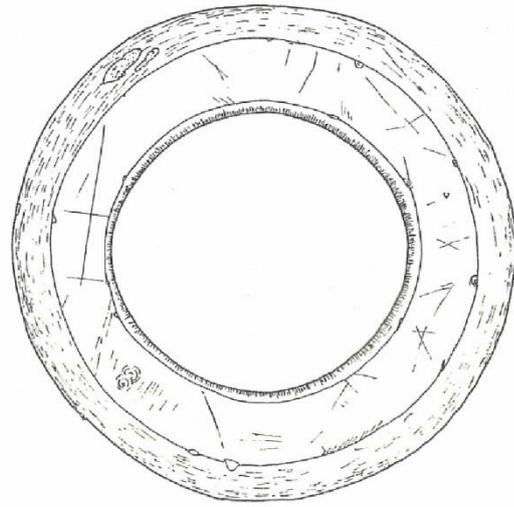
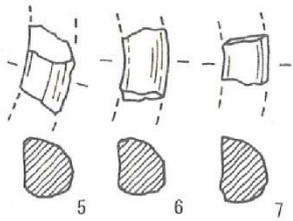


100 兵庫 伯母野山

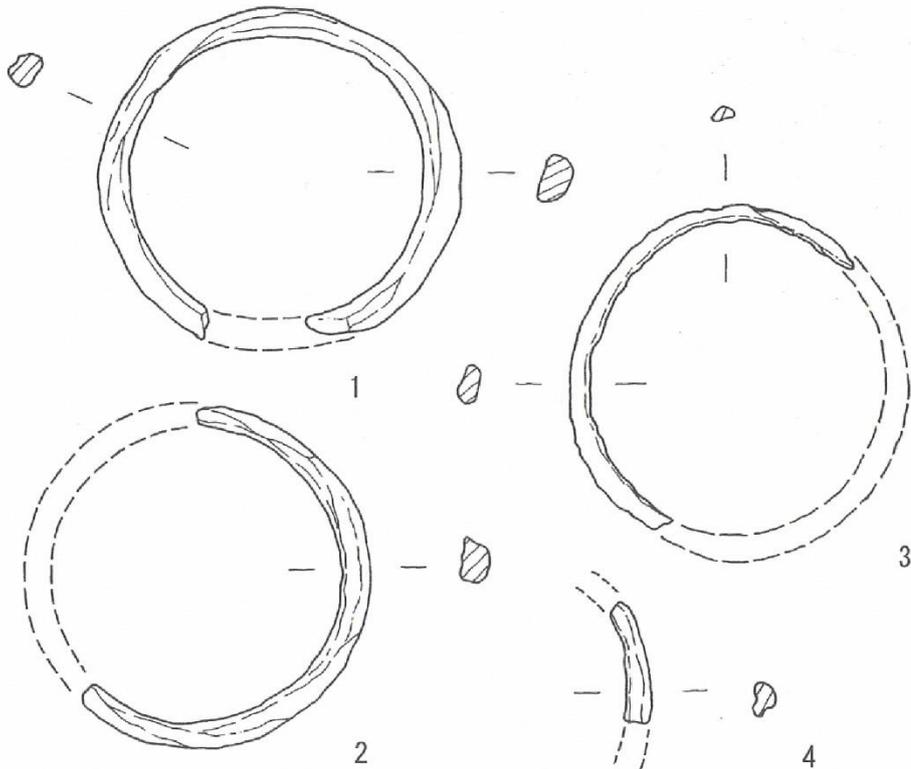
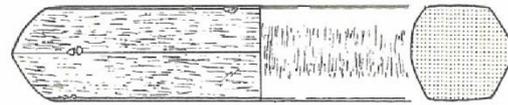
图4 畿内第Ⅲ様式弥生土器 (S=1/6)



二塚遺跡

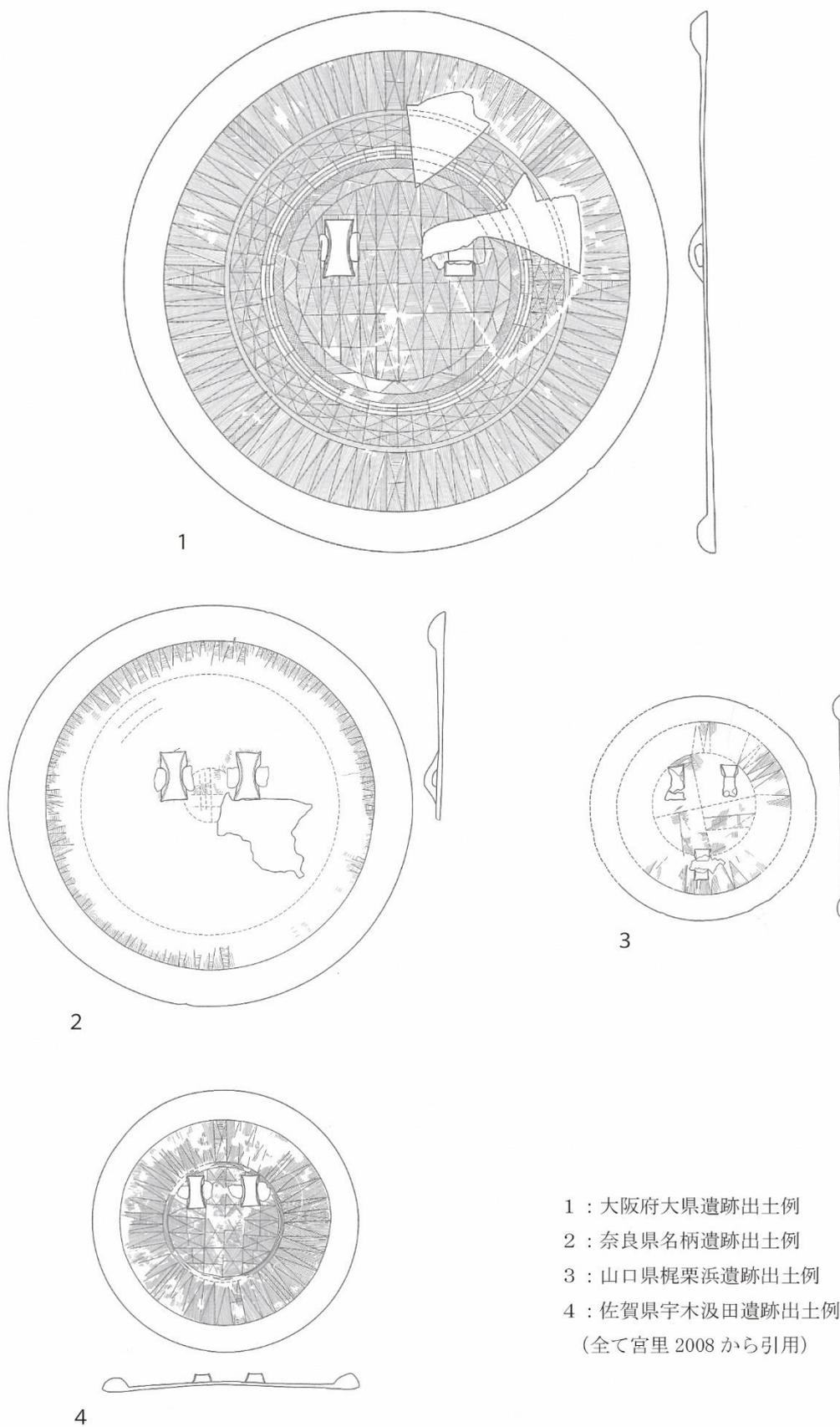


大風呂南1号墓



西谷2号墓

図5 日本列島出土のガラス釦 (S=2/3)



- 1 : 大阪府大泉遺跡出土例
  - 2 : 奈良県名柄遺跡出土例
  - 3 : 山口県梶栗浜遺跡出土例
  - 4 : 佐賀県宇木汲田遺跡出土例
- (全て宮里 2008 から引用)

図6 日本列島出土の多紐細文鏡 (S=2/5)

周囲の弥生時代遺跡から出土するサヌカイト製石器の大部分が金山産あるいは二上山産であるとされる（藁科ほか 1989）。一方、松本清張が本作を執筆した以前には、六甲山系の南東部に位置する甲山産サヌカイトを利用した石器製作の存在を示した論文もある（福原 1941）。松本清張がこのような論文を参考にしたかどうかは不明であるが、現在の考古学研究の理解とは異なっている。

#### ・ガラス釧

ガラス釧は、宗三が美奈子殺害時に落としたボタンを探していた際に土の下から見えて回収したもので、これが事件発覚の発端となった。また、宗三の大学の発掘調査ののち、地元の P 大学による遺跡発掘の際に、後述する多紐細文鏡 2 面と供伴して出土した（p457）。宗三は弥生時代中期のものとし、また、現在のところ丹後国中郡三重村発見のものと筑前国遠賀郡須玖出土の二例があると記述している。

大津忠彦がすでに指摘しているように、前者が京丹後市比丘尼屋敷墳墓出土例、後者が福岡県糸島市二塚遺跡甕棺出土例（図 5）であり、執筆時点ではこの 2 例のみが知られていた（大津 2009）。比丘尼屋敷墳墓出土例については、古墳時代のものと考えられていたが、現在は弥生時代後期後葉と考えられている（小寺 2010）。遺物の中でも非常に特異なものであり、そうした遺物が発見されることを描くことによって、新規遺跡の重要性を強調したのと考えられる。また、蓬莱峡とも近い比丘尼屋敷墳墓出土例の存在が、現実性を高めている。

刊行後から現在までに 2 例が付け加えられた。島根県出雲市西谷 2 号墓出土例と京丹後市大風呂南 1 号墓出土例である（図 5）。ともに弥生時代後期後葉に属し、特に大風呂南 1 号墓出土例は非常に精巧なものである。小寺智津子は、大風呂南 1 号墓出土例を釧としての機能ではなく、大陸から「佩玉」として受容され、大陸の葬制を模して副葬した可能性を指摘している（小寺 2009）。

松本清張のイメージしたガラス釧は、二塚遺跡甕棺出土例のような装着した釧であったといえよう。ただし、二塚遺跡甕棺は地域の首長と考えられているが、銅鏡が供伴しておらず、他地域の同時期の首長墓に比べると傑出性は低いとされる（小寺 2009）。大学の発掘調査によって出土したガラス釧は、多紐細文鏡 2 面を伴っており、二塚遺跡甕棺出土例とは全く同様のイメージではない。

#### ・多紐細文鏡

ガラス釧同様、地元の P 大学の発掘調査により多紐細文鏡 2 面が出土したと記述される。

多紐細文鏡は、朝鮮半島に多くの分布がある青銅鏡であり、日本列島でも現在 12 例の出土が知られる（宮里 2008 ほか）。日本列島出土のものは、北部九州に分布が集中する。近畿地域では、大阪府柏原市大県遺跡出土例、奈良県御所市名柄出土例がある（図 6）。この 2 例については、戦前に出土したものであり、小説執筆時点においても知られていたものである。先のガラス釧と合わせて、弥生時代出土の遺物の中でも出土事例が少ないものであり、新規発見の遺跡の重要性、特異性を示すモチーフとして選択されたものであると考えられる。

#### ⑥小結

以上、『内海の輪』における考古学世界の検討を行ってきた。大津がすでに指摘していたように、その当時最新の考古学研究に基づき、またガラス釧など将来を予測したかのような記述がみられた（大津 2009）。一方で、導入部の会話に登場する岡山の遺跡に関する記述など、筆者のオリジナリティが認められる部分も存在することが分かった。最初に触れたように、筆者が必ずしも現実の考古学世界の再現を求めているわけではない。このように考古学研究の虚実を上手く組み合わせることによって、作品の奥行きを膨らませたことが想像される。

## 5. 小説に描かれた考古学世界の変遷

### (1) 考古学世界の内容

最初に、考古学世界が登場する小説の内容について、描かれた時期による変遷の有無を検討する。表2は、考古学世界が登場する小説の中で、特に登場の割合の高いものを抜粋したものである。タイトルだけを見ても、「邪馬台国」、「卑弥呼」などの用語の付くものが圧倒的に多いことが指摘できる。その背景には、日本国内においての邪馬台国への一般的な高い関心と共通知識の存在があるだろう。邪馬台国については、1965年に宮崎康平により『まぼろしの邪馬台国』が連載開始され、松本清張も『古代史疑』を著すなど、1960年代後半に専門研究者だけではない評論書による邪馬台国ブームが起こったとされる。邪馬台国や卑弥呼が登場する小説は、それ以降に登場している。その後は、1970年代に2冊、1980年代に6冊、1990年代に4冊、2000年代に3冊、2010年代に7冊とコンスタントに刊行されていることを確認することができた。1986年以降の佐賀県吉野ヶ里遺跡の発掘調査によって再び邪馬台国ブームが起こるなど、邪馬台国に対する一般的な関心の高さに裏打ちされたものと考えられる。また、タイトルを見ると、「邪馬台国」、「卑弥呼」、「鏡」、「謎」、「殺人」、「事件」などの単語が組み合わせられていて、深谷忠記と木谷恭介の『「邪馬台国の謎」殺人事件』（1989・1998年）を除いて、タイトルが全く同一のものが存在しないことがわかる。これは、邪馬台国や卑弥呼を取り入れたタイトルにしながらも、過去の作品と同一のタイトルにしないようにする著者と編集者の努力によるものと考えられる。タイトルの名付けられた経緯はそれぞれ異なるが、そのような努力も惜しまないほどに、これらの言葉が魅力的であったものと考えられる。

次に多く存在するのが、縄文時代に関する考古学世界が登場する小説である。特に「縄文」「土偶」がタイトルにある小説が多い。島田一男『埴輪の柩—縄文殺人事件』、中津文彦『縄文土偶殺人事件』（1986年）、風野真知雄『縄文の家殺人事件』（2013年）、真梨幸子『縄紋』（2020年）などがある。

さらに次は、古墳に関するタイトルがついた小説が多く確認できた。1948年に刊行された島田一男の『古墳殺人事件』（1957年）からはじまり、黒川博行『8号古墳に消えて』（1988年）、邦光四郎『まぼろしの貴人古墳』（1989年）、内田康夫『箸墓幻想』（2001年）などがある。

他には、飛鳥時代に関する考古学世界が登場する小説がある。飛鳥時代に関連する考古学世界は、奈良県明日香村に所在する高松塚古墳・キトラ古墳のような終末期古墳や、酒船石・亀石などの石造物が登場するものがほとんどである。これには、松本清張の『火の路』（1973～1974年）も含まれる。

以上のような小説が認められる一方で、旧石器時代や古代以降の考古学に関連する小説は収集した中では認められなかった。古代以降を舞台にした小説は多数存在するが、遺跡や遺物のような考古学世界よりも、文献史料に基づく「歴史学世界」が描かれている。旧石器時代に関しては、今回収集した小説の中には認められなかったが、その比率は縄文時代から古墳時代を描いた小説よりも確実に少ないもの<sup>4)</sup>と考える。

### (2) 人物（考古学者）

表3は、表2のうち考古学者が登場する小説を抜粋したものである。表1でみた松本清張作品も一部含めている。

考古学者が主人公の小説として、『断碑』（1954年）、『内海の輪』（1969年）、『霧の子孫たち』（1970年）、「考古探偵—法師全シリーズ」（2011・2012年）などがある。『断碑』や『霧の子孫たち』は、実在

表2 考古学世界が登場する小説

刊行年	作者名	タイトル	考古学者	登場時代	遺跡	遺物
1957	島田一男	古墳殺人事件	●	古墳	多摩古墳群(東京都)	骨角器、埴輪
1970	新田次郎	霧の子孫たち	●	中世	旧御射山遺跡(長野県)	土師器、灰釉陶器など
1973	高木彬光	邪馬台国の秘密		弥生～古墳		金印など
1977	黒木曜之助	邪馬台国殺人事件		弥生～古墳		金印
1979	島田一男	埴輪の柩—縄文殺人事件		縄文～古墳		埴輪、石鏃など
1983	阿井渉介	卑弥呼殺人事件		縄文～古墳		銅鏡
1984	内田康夫	明日香の皇子		飛鳥	飛鳥宮、高松塚古墳(奈良県)など	
1985	島田一男	卑弥呼殺人事件		弥生～古墳	赤塚古墳(大分県)、江田船山古墳(熊本県)など	
1986	中津文彦	縄文土偶殺人事件		縄文		土偶
1988	黒川博行	八号古墳に消えて	●	古墳	大山古墳(大阪府)	
1988	斉藤栄	邪馬台国殺人旅情		弥生～古墳	女山神籠石(福岡県)	
1989	深谷忠記	「邪馬台国の謎」殺人事件		弥生～古墳		
1989	荒巻義雄	「新説邪馬台国の謎」殺人事件		弥生～古墳		
1989	長野誠夫	邪馬台国殺人考		弥生～古墳		
1989	邦光四郎	幻の貴人古墳		古墳	藤ノ木古墳(奈良県)、阿武山古墳(大阪府)	
1991	井沢元彦	卑弥呼伝説 地に降りた神々		弥生～古墳	吉野ヶ里遺跡(佐賀県)	
1992	深谷忠記	飛鳥殺人事件		飛鳥	高松塚古墳(奈良県)	
1996	井沢元彦	魔鏡の女王	●	古墳	藤ノ木古墳(奈良県)	銅鏡
1996	斉藤栄	縄文ジャパン殺人旅行		縄文	三内丸山遺跡(青森県)	
1998	鯨統一郎	邪馬台国はどこですか?		縄文～古墳	三内丸山遺跡・風張遺跡(青森県)	銅鏡
1998	木谷恭介	「邪馬台国の謎」殺人事件		弥生～古墳	纏向遺跡(奈良県)	
1998	柄刀一	3000年の密室	●	縄文	三内丸山遺跡(青森県)、菜畑形跡(佐賀県)など	土偶、穂摘具など
1999	柄刀一	4000年のアリバイ回廊	●	縄文		
2001	内田康夫	箸墓幻想	●	古墳	箸墓古墳、ホケノ山古墳(奈良県)	銅鏡
2001	澤田盛夫	卑弥呼の鏡の謎殺人事件		弥生～古墳	伊勢遺跡(滋賀県)	銅鏡
2002	北森鴻	触身仏	●	古墳		勾玉
2002	北森鴻	狐圃		古墳		銅鏡
2002	中津文彦	邪馬台国の殺人	●	弥生～古墳		
2005	篠田秀幸	卑弥呼の殺人		弥生～古墳	蓬萊山古墳(大分県)	銅鏡
2009	西村京太郎	吉備 古代の呪い		古墳	造山古墳、作山古墳(岡山県)	
2010		卑弥呼の赤い罨		弥生～古墳		
2010	吉村達也	飛鳥の怨霊の首		古墳～飛鳥	高松塚古墳、キトラ古墳、箸墓古墳(奈良県)など	
2011	化野燐	葬神記 考古探偵—法師全の慧眼	●	弥生	唐古・鍵(奈良県)、今宿丁田・田能(兵庫県)、東奈良・鬼虎川(大阪府)、鶏冠井(京都府)など	青銅器、サヌカイト
2011	化野燐	鬼神曲 考古探偵—法師全の不在	●	弥生・古墳	加茂岩倉遺跡(島根県)	銅鐸、鉄滓
2011	化野燐	偽神譜 考古探偵—法師全の追跡	●	弥生		福田型銅鐸、分銅型土製品
2011	北森鴻・浅野里沙子	邪馬台		弥生～古墳	桜馬場(佐賀県)、鬼ノ城(岡山県)、箸墓古墳・黒塚古墳・纏向(奈良県)、荒神谷(島根県)	銅鏡
2012	化野燐	火神録 考古探偵—法師全の記憶	●	古代など		三角縁神獸鏡など
2013	風野真知雄	縄文の家殺人事件		縄文・古墳	三内丸山遺跡(青森県)、箸墓古墳(奈良県)	埴輪、土偶
2013	鯨統一郎	邪馬台国殺人紀行	●	弥生	吉野ヶ里遺跡(佐賀県)	金印
2013	獅子宮敏彦	卑弥呼の密室		弥生～古墳		
2014	萩原浩	二千七百の夏と冬		縄文～弥生		土偶
2017	池澤夏樹	キトラ・ボックス	●	飛鳥～古代	キトラ古墳(奈良県)	禽獸葡萄鏡
2017	内田康夫	孤道	●	古墳	阿武山古墳、今城塚古墳(大阪府)	
2018	高田崇史	卑弥呼の葬祭		古墳	凶首塚古墳(大分県)	
2019	和久井清水	孤道完結編 金色の眠り	●	古墳	阿武山古墳、今城塚古墳(大阪府)	
2019	三津田信三	魔偶の如き齋すもの		縄文		土偶
2020	真梨幸子	縄紋		縄文	千駄木貝塚(東京都)	土偶

表3 考古学者が登場する小説

タイトル	著者	発表年	名前	役割	専門	職業	性別	年齢
断碑	松本清張	1954	木村卓治	主人公	弥生時代	教員	男性	10-30代
古墳殺人事件	島田一男	1957	曾根辞郎	被害者	東洋	大学教授	男性	40歳前後
死神の矢	横溝正史	1956	古館博士	その他	契丹文化	不明	男性	中年
内海の輪	松本清張	1969	江村宗三	主人公(加害者)	弥生時代	大学助教授→教授	男性	40代前半
霧の子孫たち	新田次郎	1970	宮森栄之助	主人公		在野	男性	50歳
仮面舞踏会	横溝正史	1974	的場英明	その他	インダス文明	不明	男性	30代後半
八号古墳に消えて	黒川博行	1988	浅川亮介	被害者		大学教授	男性	53歳
			今村浩郎	加害者	縄文時代	大学助教授	男性	39歳
			高橋正人	その他	弥生時代	大学助手	男性	30歳
			秦野史子	その他	服飾、工芸史	大学助手	女性	28歳
魔鏡の女王	井沢元彦	1996	田口直樹	被害者	古墳時代	民間研究所	男性	29歳
箸墓幻想	内田康夫	2001	小池拓郎	被害者	邪馬台国	公立研究機関	男性	76歳
			平沢徹	被害者	古墳時代古墳	公立研究機関	男性	40代後半
			島田いづみ	加害者		公立研究機関	女性	42歳
			丸岡孝郎	その他	古墳時代古墳	公立研究機関	男性	37歳
死満瓊	北森鴻	2002	奥津城要	加害者	古墳時代副葬品	国立研究機関	女性	30代
考古探偵一法師全シリーズ	化野燐	2011・2012	一法師全	主人公(探偵)	弥生時代青銅器	民間研究所	男性	
邪馬台国殺人紀行	鯨統一郎	2013	川島義一	加害者	邪馬台国	大学教授	男性	60歳
			井口岳彦	被害者	邪馬台国	大学准教授	男性	27歳
キトラ・ボックス	池澤夏樹	2017	藤波三次郎	その他	縄文～弥生、古代史	大学准教授	男性	中堅
狐道、狐道完結編 金色の眠り	内田康夫 和久井清水	2017・2019	柿崎泰正	被害者	古墳時代	大学教授	男性	

の人物をモデルとして、事実をもとに脚色したものである。また考古学者の役割として、特にミステリー小説において、事件の加害者及び被害者となるのが圧倒的に多いことがわかる。

考古学者の専門は、弥生時代と古墳時代を専門とする割合がかなり高い。また横溝正史の作品には、海外考古学を専門とする考古学者が『死神の矢』(1956年)と『仮面舞踏会』(1974年)に登場する。

考古学者の性別は、圧倒的に男性が多いことがわかる。女性の考古学者が単独で登場するものは、「死満瓊」(北森鴻『触身仏』所収)を除き、見られなかった。傾向として少数であろうことがわかる。

考古学者の年齢は、20代から70代まで多様である。これらに傾向を見いだすことはできなかったが、大学教授の年齢は比較的高い傾向にあり、一般的な感覚と変わらないといえる。

### (3) 遺跡

表2に挙げた小説に登場する遺跡を時代別にみていく。縄文時代が登場した小説をみると、三内丸山遺跡(青森県)の登場が圧倒的であることがわかる。三内丸山遺跡は、一般的に知られた縄文時代の代表的遺跡であることから、登場することが多いと考えられる。

弥生時代の遺跡としては、伊勢遺跡(滋賀県)、吉野ヶ里遺跡(佐賀県)などが認められ、これらに関しては、邪馬台国の関連遺跡として登場している。また加茂岩倉遺跡(島根県)は、1994年に新たに確認された遺跡で、銅鐸などの青銅器が多量埋納されていたことが話題となった。

古墳時代の遺跡としては、古墳の登場が多くなる。古墳時代前期の古墳としては、箸墓古墳(奈良

表4 邪馬台国の所在地に関する記述が登場する小説

タイトル	著者	発表年	位置
まぼろしの邪馬台国（参考）	宮崎康平	1967	九州説
邪馬台国の秘密	高木彬光	1973	九州説
邪馬台国殺人考	邦光四郎	1978	九州説
卑弥呼塚殺人事件	島田一男	1985	九州説
邪馬台国殺人旅情	斉藤栄	1988	九州説
卑弥呼殺人事件	阿井祥介	1991	静岡
「新説邪馬台国の謎」殺人事件	荒巻義雄	1992	九州説
「邪馬台国の謎」殺人事件	深谷忠記	1993	大和説・九州説
邪馬台国はどこですか	鯨統一郎	1998	岩手
邪馬台国の殺人	中津文彦	2002	九州説
卑弥呼の殺人	篠田秀幸	2005	九州説
邪馬台国の女王	樋口祥	2015	大和説
卑弥呼の葬祭	高田崇史	2018	九州説

県)、赤塚古墳・蓬莱山古墳（大分県）などがあるが、これらの古墳は邪馬台国との関連で登場している。中期では、大山古墳（大仙陵古墳：大阪府）、造山古墳・作山古墳（岡山県）などの墳丘規模 280m

をこえる巨大古墳が登場している。後期・終末期古墳としては、今城塚古墳・阿武山古墳（大阪府）、藤ノ木古墳・高松塚古墳・キトラ古墳（奈良県）などの一般的な知名度の高い古墳が登場する。いずれも被葬者の検討も進められている古墳であり、そうした点も小説への登場につながっているものと考えられる。

#### （4）遺物

遺跡と同様に時代別にみていく。縄文時代で登場する遺物は、土偶が大多数を占めている。弥生時代関連の遺物としては、金印が頻出する。これは邪馬台国関連の小説と相関する。そのほか、「一法師全シリーズ」では、銅鐸などの青銅器が登場し、特に銅鐸の鋳型が出土した生産遺跡が挙げられている。

古墳時代の遺物として最も登場するのは銅鏡である。登場する銅鏡には、三角縁神獣鏡・画文帯神獣鏡などが含まれ、邪馬台国関連の小説を中心として登場している。『キトラ・ボックス』（2017年）では、隋唐鏡である海獣葡萄鏡が内容に大きく関わる。そのほか古墳時代に関連する遺物として埴輪などが登場している。

#### （5）邪馬台国

最初に見たように、邪馬台国や卑弥呼は考古学世界を描いた小説に多く登場するトピックである。ここで、邪馬台国の所在地などを検討するつもりは毛頭ないし、自らの意見を表明するつもりもないが、小説の中でどの説を採用するかを見ることで、小説世界の変遷の有無などを検討したい。

集成した小説のうち、邪馬台国の位置について述べた小説は表4である。これをみれば、そのほとんどが北部九州説を採っていることがわかる。逆に考古学分野では重視されてきた畿内説の人気の無いことが、考古学世界の描かれ方として重要であると考えられる。なお近年、考古学においても北部九州説を支持する著書が刊行されており（関川 2020、坂 2020 など）、最新の考古学研究に基づいた北部九州説を小説として描く土壌は揃いつつある。

#### （6）小結

以上、日本で刊行された小説の中で考古学世界が描かれたものを取り上げ、検討を行ってきた。ここで明らかになったのは、考古学における重大発見が、小説の考古学世界の登場と大きく連動している、ということである。遺跡をみると、縄文時代の三内丸山遺跡（青森県）は1992年以降に本格的な発掘調査が行われるが、それ以降、多くの小説に登場するようになる。また吉野ヶ里遺跡（佐賀県）についても、1986年の発掘調査以降、邪馬台国との関連で登場するようになる。遺物についてみれば、三角縁神獣鏡などの銅鏡が1990年代後半以降多数の小説に登場するようになるが、これは1997年から1998年にかけて行われた黒塚古墳（奈良県）の発掘調査において、33面の三角縁神獣鏡と1面の画文帯神獣鏡が出土したと無関係ではないだろう。高松塚古墳（奈良県）の発見（1972年）、藤ノ木古墳（奈良県）の発掘（1985・1988年）なども同様である。このように考古学の重大発見による情報が、小説における考古学世界の構築、変化に大きく影響をもたらしている。

その一方で、前章で検討した松本清張作品と比較してみると、松本清張作品で登場したような一般的に知られていない遺跡・遺物がほとんど登場していないことがわかる。このことについては、次章で少し考察したい。

### 6. 考古学と大衆文化としての小説

#### （1）松本清張の描いた考古学世界と以後の小説に描かれた考古学世界

前の2章で、松本清張作品における考古学世界と、他の小説における考古学世界の検討を行ってきた。

松本清張は生涯多くの作品を残したが、それに比例するように考古学世界が登場する作品が多い。その作品は1950年代から1960年代に多く認められ、1970年代以降は海外の考古学世界が多く登場するようになる。松本清張の興味関心を示すものと考えられるが、決して弥生時代や古墳時代への興味が失われたわけではない。松本清張は、1970年代以降も日本考古学や邪馬台国に関する主張を多く行っている事実がある（松本 1986～1989 など）。これは、小説に弥生時代や古墳時代に対する自己の主張を登場人物及び小説の世界観に反映させるこれまでのスタイルから、直接評論などで自己の論の主張を行うようになったと考えられる。対して、それまで作品に表現してこなかった海外考古学を登場させるようになる事実は興味深い。

一方、松本清張以降の小説において、これほどまでに考古学世界を構築し続けた著者はいないといえる。特に、検討で明らかとなったように、自己の作品に取り上げる考古学世界は、考古学上の重大発見で、一般にも話題となり認知度の高い遺跡・遺物を中心としている。これは、考古学世界を取り入れる際に、小説読者の認知度の高いものを作品のエッセンスとして選択したのと考えられる。

本項で検討した松本清張の作品の中でも考古学世界が強く登場する『内海の輪』と、それ以後の小説

に登場する考古学世界を比較してみよう。まず、江村宗三という考古学者を主人公として、加害者の視点で描かれた倒叙形式の作品であるということに独自性が認められる。このような視点で描かれることにより、主人公の犯行以前から発覚までの過程における感情の機微と、考古学に対する情熱の両者を描くことに成功している。次に、ガラス釧や多紐細文鏡など、後の考古学世界に描かれていない遺物を当時最新の研究成果を忠実に取り入れながら扱っていることに独自性が認められる。一方で、主人公の大学教員という職業や専攻、年齢などは、後の小説とも共通しており、その構築された考古学世界は、現在の小説内の考古学世界に繋がっているともいえるだろう。そのような意味で1960年代後半に著された『内海の輪』は、考古学世界を描いた作品の中でも一つの金字塔ともいえる作品であると考えられる。

## (2) 考古学世界と大衆文化

最後に今回明らかとなった小説における考古学世界が、他の大衆文化に描かれた考古学世界と共通しているかどうかをみたい。

最初に触れた下垣によるフィクションの考古学者の4象限分類(下垣2010)に基づいて、本稿の検討を見てみると、ほとんどの作品が「物語に参入しつつも、積極的に世間とのかかわりをもたず、ひたすら学問に生きる考古学者像」であるI型(脱俗/物語参入型)であると考えられる。「物語に積極的に参入し、そのすぐれた肉体的・頭脳的能力を活かして大活躍し、物語を主体的に牽引してゆくタイプ」であるII型(超俗/物語参入型)は、「考古探偵一法師全シリーズ」のような一部の作品にのみ限られる。今回の検討により、小説の分野において考古学世界が描かれる場合、I型の考古学者が最も多く登場することが明らかとなった。さらに下垣は、I型を、世間に順応できず、しばしば学問の世界で夢破れ、破滅してゆく人物像である破滅型と、古代のロマンを追いかける無垢な人物として描かれる穏健型に分類し、松本清張の作品に登場する多くの考古学者を破滅型とした(下垣2010)。破滅型の考古学者は、松本清張以後の小説にも多く登場し、ミステリー小説の世界では時には加害者、時には被害者となって登場している。

櫻井準也は、大衆文化(映画・テレビドラマ・アニメ)に描かれた考古学者像の変遷を明らかにしている(櫻井2014)。まず国内映画では、古くは文芸映画に登場し、1960年代以降はコメディやホラーなど多様な映画に登場するようになる。またテレビドラマでは、1960年代から1970年代は変身ヒーロードラマが中心であったのが、1980年代以降ミステリードラマが急増しその中心となる。今回の検討結果からは、テレビドラマとの相関性が認められる。その内容の比較については、本稿では行うことができないが、大衆文化の複数のジャンルの中で、ミステリーという共通の舞台が多いという傾向は、発掘調査や研究を通して、謎を明らかにするという考古学者の特性と関係するところであろう。

## 7. おわりに—小説に描かれた考古学世界の理想と現実—

以上、小説に登場する考古学世界についての検討を行ってきた。松本清張の作品を中心として検討を行い、他の著者の小説とも比較検討を行った。

考古学世界を取り扱った小説の中には、犯罪の被害者や加害者となる場合、捏造を実行する場合などネガティブに描写されることが少なからずある。しかし問題の本質がそこにあるのではなく、考古学世界が大衆文化の中で現状どのような位置を占めているかの羅針盤として、未来を見つめ、成果の発信方法などを検討していく必要が考古学側にはあるだろう。また、大衆文化に登場する考古学世界は、「現代

社会において一般の人々が抱く考古学者や考古学を知る手がかり」(櫻井 2014)となる。現実の考古学的な諸事実を基盤としながら、小説に描かれた考古学世界の理想に辿り着けるのかどうか、私達が思いつくことのできなかつた仮説群がそこに眠っている可能性があるのである。

註)

- 1) 一般的に考古学者は、自己のことを考古学者と名乗ることを避ける(酒井 2002)。本稿では、便宜的に考古学を研究する人々の総称として、考古学者の呼称を使用する。
- 2) インディ・ジョーンズは、現実の考古学者ゴードン・チャイルドに影響を受けたとされる(櫻井 2014)
- 3) 総務省統計局「日本の統計 2021 第 26 章文化 5.書籍新刊点数と平均価格」(<https://www.stat.go.jp/data/nihon/26.html>, 2022 年 1 月 28 日閲覧)を参照した。
- 4) テレビドラマでは、「地の塩」(WOWOW、2014 年)に旧石器時代の考古学世界が登場する。この作品は、2000 年に発覚した旧石器捏造事件を基に制作されたものである。

#### 【参考文献】

- 石橋茂登 2011「銅鐸・武器形青銅器の埋納状態に関する一考察」『千葉大学人文社会科学研究』22 号  
千葉大学大学院人文社会科学研究科
- 出雲市教育委員会 2006『西谷墳墓群』
- 岩滝町教育委員会 2000『大風呂南墳墓群』
- 岩永省三 1980「弥生時代青銅器型式分類編年再考—剣矛戈を中心として—」『九州考古学』第 55 号 九州考古学会
- 大津忠彦 2009「小説『内海の輪』に読む考古学」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』  
4 筑紫女学園大学
- 大津忠彦 2013「松本清張文学作品における「考古学もの」への契機・始動と昇華」『福岡大学考古学論集 2 —考古学研究室開設 25 周年記念—』
- 大津忠彦 2014「松本清張文学にみる「添景」としての考古学」『東アジア古文化論攷』I 高倉洋彰先生退職記念論集刊行会
- 大津忠彦 2015「松本清張著『風紋』における「考古学」と「西アジア」」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』10 筑紫女学園大学
- 大津忠彦 2017「松本清張著『笛壺』の構成する古代史研究の世界」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』12 筑紫女学園大学
- 大津忠彦 2020「作家松本清張の作品が描き遺す考古学の時代性—遺跡・遺物・探査との距離感—」『福岡大学考古学論集 3—武末純一先生退職記念—』武末純一先生退職記念事業会
- 大平茂・種定淳介 2009「昭和 44 年度発掘調査出土の古津路銅剣について」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第 2 号 兵庫県立考古博物館
- 鎌木義昌・木村幹夫 1956「中国」『日本考古学講座』第 3 巻 縄文文化 河出書房
- 鎌木義昌・高橋護 1965「瀬戸内」『日本の考古学』II 縄文時代 河出書房新社
- 絹嶋歩 2017「ミステリー小説からみた考古学の世界」『檀考研通信』Vol.2 奈良県立橿原考古学研究所

- 絹島歩・前田俊雄 2018 「ミステリー小説からみた考古学の世界（3）」『樞考研通信』Vol.5 奈良県立橿原考古学研究所
- 小寺智津子 2010 「弥生時代のガラス釧とその副葬」『東京大学考古学研究室研究紀要』24 東京大学大学院人文科学研究科・文学部考古学研究室
- 小林博昭 1997a 「黄島貝塚」『牛窓町史』資料編Ⅱ 考古・古代・中世・近世 牛窓町
- 小林博昭 1997b 「黒島貝塚」『牛窓町史』資料編Ⅱ 考古・古代・中世・近世 牛窓町
- 小林行雄・杉原壮介編 1968 『弥生式土器集成』本編2 東京堂出版
- 酒井龍一 1990 『考古学者の考古学』大阪文化財センター考古学ブックス 財団法人大阪文化財センター
- 酒井龍一 2002 「考古学論文の考古学（試論）」『文化財学報』第20集 奈良大学文学部文化財学科
- 櫻井準也 2014 『考古学とポピュラー・カルチャー』同成社
- 櫻井準也 2021 『マンガと考古学—その親密な関係を探る—』オンデマンドライブラリー1 六一書房
- 下垣仁志 2010 「フィクションの考古学者」『遠古登攀—遠山昭登君追悼考古学論集—』『遠古登攀』刊行会
- 関川尚功 2020 『考古学から見た邪馬台国畿内説—畿内ではありえぬ邪馬台国』梓書院
- 曹雅潔 2017 「松本清張の推理小説の出発—「火の記憶」から「顔」へ—」『Comparatio』21 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
- 高橋健自 1925 『銅鉦銅劍の研究』聚精堂
- 田辺昭三・佐原真 1966 「3 近畿」『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』河出書房新社
- 春成秀爾 2003 「情熱の人と学問—森本六爾」『考古学者はどう生きたか—考古学と社会—』学生社
- 坂靖 2020 『ヤマト王権の古代学—「おおやまと」の王から倭国の王へ—』新泉社
- 平岡敏夫 2005 「「断碑」論—藤森栄一『森本六爾伝』と共に—」『松本清張研究』第6号 北九州市立松本清張記念館
- 兵庫県教育委員会 1969 『神戸市桜ヶ丘銅鐸、銅戈調査報告書（解説編）』兵庫県文化財調査報告第1冊
- 福原潜次郎 1941 「攝津武庫郡甲山北五ヶ山石器製作場遺跡について」『考古学雑誌』第31巻第1号 日本考古学会
- 藤岡謙二郎 1949 「瀬戸内海黄島貝塚発掘概報」『日本史研究』第11号 日本史研究会
- 藤田等 1994 『弥生時代ガラスの研究—考古学的方法—』名著出版
- 間壁忠彦・間壁菫子 1968 「岡山県美星町五万原遺跡（住居址群）」『倉敷考古館集報』第5号 財団法人倉敷考古館
- 松本清張 1986～1989 『清張通史（1）～（6）』講談社文庫
- 宮里修 2008 「多紐細文鏡の型式分類と編年」『考古学雑誌』第92巻第1号 日本考古学会
- 若林泰・斉藤英二 1963 『叔母野山彌生遺跡—神戸市灘区篠原高地性遺跡出土遺物概況—』神戸市文化財調査報告6 神戸市教育委員会
- 和田萃 2011 「影ふみ—森本六爾追想—」『森本六爾関係資料集Ⅰ』財団法人由良大和古代文化研究協会
- 藁科哲男・丸山潔・東村武信 1989 「サヌカイトの流通から見た弥生時代摂播国境地域の交流関係」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

## 【小説一覧】

※できる限り比較的入手しやすいものを挙げた。また、括弧内の年号は、最初の刊行年である。

- 阿井渉介 1991『卑弥呼殺人事件』徳間文庫（1983年）
- 化野燐 2011『葬神記 考古探偵一法師全の慧眼』角川文庫（2011年）
- 化野燐 2011『鬼神曲 考古探偵一法師全の不在』角川文庫（2011年）
- 化野燐 2011『偽神譜 考古探偵一法師全の追跡』角川文庫（2011年）
- 化野燐 2012『火神録 考古探偵一法師全の記憶』角川文庫（2012年）
- 荒巻義雄 1992『「新説邪馬台国の謎」殺人事件』講談社文庫（1989年）
- 池澤夏樹 2020『キトラ・ボックス』角川文庫（2017年）
- 井沢元彦 1991『卑弥呼伝説 地に降りた神々』実業之日本社（1991年）
- 井沢元彦 2002『魔鏡の女王』集英社文庫（1996年）
- 内田康夫 1986『明日香の皇子』角川文庫（1984年）
- 内田康夫 2004『箸墓幻想』角川文庫（2001年）
- 内田康夫 2019『孤道』講談社文庫（2017年）
- 風野真知雄 2013『縄文の家殺人事件』だいわ文庫（2013年）
- 木谷恭介 2000『「邪馬台国の謎」殺人事件』広済堂文庫（1998年）
- 北森鴻 2005『触身仏』新潮文庫（2002年）
- 北森鴻 2020『狐闇』徳間文庫（2002年）
- 北森鴻・浅野里沙子 2014『邪馬台』新潮文庫（2011年）
- 鯨統一郎 1998『邪馬台国はどこですか？』創元推理文庫（1998年）
- 鯨統一郎 2013『邪馬台国殺人紀行』実業之日本社文庫（2013年）
- 邦光四郎 1984『七つの邪馬台国』徳間文庫（1977年）
- 邦光四郎 1992『幻の貴人古墳』徳間文庫（1989年）
- 黒川博行 2021『8号古墳に消えて』角川文庫（1988年）
- 黒木曜之助 1977『邪馬台国殺人事件』日本文華社（1977年）
- 斉藤栄 1988『邪馬台国殺人旅情』祥伝社ノン・ノベル（1988年）
- 斉藤栄 1996『縄文ジャパン殺人旅行』トクマ・ノベルズ（1996年）
- 澤田盛夫 2001『卑弥呼の鏡の謎殺人事件』新風舎（2001年）
- 獅子宮敏彦 2013『卑弥呼の密室』祥伝社（2013年）
- 篠田秀幸 2005『卑弥呼の殺人』ハルキ・ノベルズ（2005年）
- 島田一男 1995『埴輪の柩—縄文殺人事件』光風社文庫（1979年）
- 島田一男 1985『卑弥呼塚殺人事件』光文社文庫（1985年）
- 島田一男 2002『古墳殺人事件』扶桑社文庫（1957年）
- 高木彬光 2006『邪馬台国の秘密 新装版』光文社文庫（1974年）
- 高田崇史 2019『卑弥呼の葬祭』新潮文庫（2018年）
- 柄刀一 2002『3000年の密室』光文社文庫（1998年）
- 柄刀一 2002『4000年のアリバイ回廊』光文社文庫（1999年）
- 長崎尚志 2017『邪馬台国と黄泉の森』新潮文庫（2015年）

長野誠夫 1989『邪馬台国殺人考』文藝春秋（1989年）  
中津文彦 1988『縄文土偶殺人事件』双葉文庫（1986年）  
中津文彦 2002『邪馬台国の殺人』光文社カッパ・ノベルス（2002年）  
西村京太郎 2018『十津川警部「吉備 古代の呪い」』新潮文庫（2009年）  
新田次郎 2010『新装版 霧の子孫たち』文春文庫（1970年）  
萩原浩 2017『二千七百の夏と冬』双葉文庫（2014年）  
樋口祥 2015『邪馬台国の女王』近代文藝社（2015年）  
深谷忠記 2000『「邪馬台国の謎」殺人事件』徳間文庫（1989年）  
深谷忠記 2005『飛鳥殺人事件』徳間文庫（1992年）  
松本清張 1971「万葉翡翠」『松本清張全集 1 点と線・影の車』文藝春秋（1961年）  
松本清張 1971「土偶」『松本清張全集 6 球形の荒野・死の枝』文藝春秋（1967年）  
松本清張 1971「内海の輪」『松本清張全集 9 黒の様式』文藝春秋（1968年）  
松本清張 1972「不安な演奏」『松本清張全集 11 歪んだ複写 不安な演奏』文藝春秋（1961年）  
松本清張 1972『松本清張全集 18 波の塔』文藝春秋（1959年）  
松本清張 1972「断碑」「笛壺」「石の骨」『松本清張全集 35 或る「小倉日記」伝』文藝春秋（1955・1956年）  
松本清張 1973「鷗外の婢」『松本清張全集 10 黒の凶説』文藝春秋（1969年）  
松本清張 1973「途上」「カルネアデスの舟板」『松本清張全集 36 地方紙を買う女 短編 2』文藝春秋（1956・1957年）  
松本清張 1973「支払い過ぎた縁談」『松本清張全集 37 装飾評伝 短編 3』文藝春秋（1957年）  
松本清張 1974「古代史疑」『松本清張全集 33 古代史疑・古代探求』文藝春秋  
松本清張 1974「月」『松本清張全集 38 皿倉学説 短編 4』文藝春秋（1967年）  
松本清張 1974『葦の浮船』角川文庫（1966～1967年）  
松本清張 1980「距離の女囚」『共犯者』新潮文庫（1954年）  
松本清張 1982「高台の家」『松本清張全集 39 遠い接近・表象詩人』文藝春秋（1972）  
松本清張 1983「火の路」『松本清張全集 50 火の路』文藝春秋（1973・1974年）  
松本清張 1984「眩人」『松本清張全集 51 眩人・文豪』文藝春秋（1977～1980年）  
松本清張 1984「火神被殺」「巨人の磯」「神の里事件」「冷遇の資格」『松本清張全集 56 東経 139 度線 短編 5』文藝春秋（1970～1972年）  
松本清張 1995『松本清張全集 58 熱い絹』文藝春秋（1972～1984年）  
松本清張 1996「ネッカー川の影」『松本清張全集 66 老公 短編 6』文藝春秋（1990年）  
松本清張 2001『高校殺人事件』光文社文庫（1959～1961年）  
真梨幸子 2020『縄紋』幻冬舎（2020年）  
三津田信三 2019『魔偶の如き齋すもの』講談社（2019年）  
宮崎康平 2008『新装版 まぼろしの邪馬台国』第1部・第2部 講談社文庫（1965年）  
吉村達也 2010『卑弥呼の赤い罨』集英社文庫（2010年）  
吉村達也 2010『飛鳥の怨霊の首』集英社文庫（2010年）  
横溝正史 1976『仮面舞踏会』角川文庫（1974年）

横溝正史 2022『死神の矢』角川文庫（1956年）

和久井清水 2019『孤道完結編 金色の眠り』講談社文庫（2019年）

#### 【図版出典】

図1 下垣 2010

図2 兵庫県立考古博物館 HP 兵庫県遺跡地図 ([https://www.hyogo-koukohaku.jp/modules/info/index.php?action=PageView&page\\_id=19](https://www.hyogo-koukohaku.jp/modules/info/index.php?action=PageView&page_id=19)) 「88 宝塚」を改変

図3 1・2：兵庫県教育委員会 1969、3：大平・種定 2009 を改変

図4 小林・杉原編 1968 を改変

図5 二塚遺跡：藤田 1994、大風呂南1号墓：岩滝町教育委員会 2000、西谷2号墓：出雲市教育委員会 2006 を改変

図6 宮里 2008 を改変

表1～4 筆者作成

写真1～4 筆者撮影

#### 追記（2022.4.7）

脱稿後、松本清張の作品のうち、考古学世界が登場する作品である『神々の乱心』が本文に無いことについてご指摘を受けた。『神々の乱心』は、「週刊文春」に1990年3月29号から1992年5月21日号まで連載され、松本清張の病気により休載のまま終わった未完の作品である。大正から昭和初期の日本と満州を舞台に新興宗教団体の陰謀を描いた松本清張の絶筆の作品の一つでもある。

本書に登場する遺跡や名前の挙がる遺跡として、宮滝遺跡・三陵墓古墳群（奈良県）、篠山貝塚（栃木県）、雷電山（ライデンヤマ）古墳・吉見百穴・黒岩横穴墓群（埼玉県）などがある。このように日本の多様な遺跡が登場する作品は、本稿で述べたように1970年代以前の作品に多い傾向があり、本書が松本清張の「最後の長編小説」であると同時に、考古学世界が登場する作品の集大成でもあった。

また、何と言っても作品内のキーとなるアイテムとして多紐細文鏡が登場する。多紐細文鏡が主題となって登場するのは、本稿で詳細な分析を行った『内海の輪』以来であり、松本清張が多紐細文鏡についてその後も関心を持ち続けていたことがわかると同時に、考古学世界の最終作品でもある本作に登場する背景についてはさらなる検討が必要だろう。

さらに本書には、当時の古墳の盗掘に関して多くの描写がある。実際、大正5（1916）年には、大阪府・京都府・奈良県の3府県に及ぶ皇陵盗掘事件が発生しており、裁判記録から出土遺物の照合を試みた研究がある（鐘方正樹・高木清生・山上豊 2018「北和城南古墳出土品の研究—裁判記録に残る皇陵盗掘事件の真相—」『研究紀要』第22集 公益財団法人由良大和古代文化研究協会）。両者共通して郡山警察署が関わっており、このような実際の事件と、本作品の描写を重ね合わせて検討することも可能である。

本書に描かれた考古学世界は以上のように非常に多岐にわたっており、ここで詳細な検討を行うのは難しい。詳細な分析については、別稿に期すことでその責を果たしたい。ご指摘をいただいた北九州市立松本清張記念館中川里志様に感謝申し上げます。